

震災被災地で映画館はどのような役割を担うのか

宮城県石巻市の映画上映会を事例に

石垣尚志

The Role of a Cinema in a Local Community
A Field Research of Film Showings in Ishinomaki, Miyagi

ISHIGAKI Takashi

Abstract

This paper looks at film showings (activities of showing movies) in Tohoku after the 2011 earthquake and tsunami and examines the role of film showings in a local community. This paper presents the research on film showings in Ishinomaki city, Miyagi prefecture. Based on a case study, this paper examines the role of film showings for development and revitalization of local communities. The role of film showings is to provide the enjoyment and pleasure of seeing movies and to create time and place for communication. It is the place where people get together and talk together before and after seeing a movie. Film showings in Ishinomaki have been creating local networks and engaging in community development.

1. はじめに

石垣 (2022) では、ノルウェーの文化政策と映画政策を考察した。そして、ノルウェーでは国と地方自治体の文化政策の中に映画館を位置づけていること、映画館が地域コミュニティの中で文化的な拠点のひとつとしての役割を担っていることを明らかにした。ノルウェーと日本では文化政策の考え方が異なっており、ノルウェーの政策を日本に適用することは政策的にも実践的にも実現可能性は低い。しかしながら、日本の地方レベルにおいて、映画館を地域の文化拠点として捉えるような取り組みを行なっているところがある。ここで紹介したものは、岩手県宮古市「シネマ・デ・アエル」、兵庫県宝塚市「シネ・ピピア」、群馬県高崎市「高崎電気館」、埼玉県深谷市「深谷シネマ」である。

ここに挙げた取り組みには、それぞれ独自な点はあるが、映画館を地域の文化拠点として捉えるという考え方は共通している。このような「文化拠点としての映画館」の取り組みを、全国各地の地域レベルでの文化政策のなかに位置づけていくことはできないだろうか。地域

の活性化のアクターとして、あるいは地域の文化拠点のひとつとして既存の映画館を活用することができるのではないだろうか。国全体としての制度を目標としつつも、地方の取り組みを支援して「ボトムアップ」のような形で「文化施設」あるいは「地域の文化拠点」として映画館を位置づけていくことができるのではないかと考える。新たな法制度を検討しながら、現在、各地で行われている映画館の取り組みを「地域の文化拠点としての活動」として捉え、自治体の文化政策の対象とする、ということである。(石垣、2022、p.60)

本稿では、このような関心にもとづいて、ひとつの地域における取り組みを詳しく取り上げる。そして、地域の中で映画館や映画上映会が具体的にどのような役割を担っているのかを記述する。地域の「文化拠点」としての映画館の役割、あるいは地域における映画館のあり方や存在意義を詳しく描き出すことが本稿の目的である。

事例として取り上げるのは、東日本大震災の被災地である宮城県石巻市で行われている野外上映会と定期的な上映会である。以下、2章では上映会を実施する団体「ISHINOMAKI2.0」の概要、3章では石巻の夏祭りや野外上映会、4章では定期的な上映会である「ISHINOMAKI 金曜映画館」の内容を見ていき、5章では石巻という街における上映会の存在と役割について考えていく。

2. 一般社団法人 ISHINOMAKI2.0 の概要

2.1 石巻市の概要

石巻市は宮城県の北東部に位置して、太平洋に面している。市のほぼ中央を旧北上川が南北に流れており、旧北上川河口から石巻駅までが中心市街地となっている。

2021年9月末時点で人口は139,136人、世帯数は61,996であり、県内第二の人口を擁する。東日本大震災前の2010年10月1日の人口は160,826人、世帯数は57,871だった。¹

東日本大震災による石巻市の被害状況は、直接死3,061人、関連死276人、行方不明416人である(2020年11月末現在)。家屋の被害は、全壊20,042棟、半壊13,048棟、一部損壊23,615棟であり、全家屋のうち約76%が何らかの損害を受けた²。

2.2 一般社団法人 ISHINOMAKI2.0

震災によって甚大な被害を受けた石巻の再生をめざして活動する団体がある。それは一般社団法人 ISHINOMAKI2.0 (以下、2.0) である。2.0の代表は団体の立ち上げの経緯を次のように語る。

¹ 石巻市の人口と世帯は、市のWEBサイトを参照。
<https://www.city.ishinomaki.lg.jp/d0030/d0120/index.html>、閲覧日：2022年11月29日。

² 『石巻市のあゆみ2017』(石巻市、2017年3月)

われわれの団体ができたのは震災後です。ボランティア活動を契機として出会った外部の人たち、専門的な知識を持っている人たち、デザイナーや都市計画とか、そういうクリエイティブな能力を持っている人たちと地域のなかで問題意識を持っていた人たちで、震災を契機に「できることからやっつけよう」、「オープンでクリエイティブな街を作ろう」として立ち上がった団体です。³

活動が始まった初期のころから行われているプロジェクトには、①IRORI 石巻（オープンシェアオフィス兼 2.0 の事務所）、②復興バー（津波で浸水したお店を改装）、③石巻 VOICE（フリーペーパーの発行）、④街歩きマップの作成、⑤STAND UP WEEK（石巻最大のお祭り「川開き祭り」7月31日～8月1日までの1～2週間にさまざまなイベントを開催）、⑥石巻コードモプロジェクト（プレーパークの運営、NPO 法人コードモ・ワカモノまち ing との共同事業）、⑦石巻まちの本棚（貸本、古書販売、トークイベントなど、「一箱本送り隊」との共同事業）、⑧石巻・手作り CM プロジェクト（石巻の個人商店に歌とコマ撮りアニメによる CM をプレゼント、アーティストとの共同事業）などがある。これらの他にも、外部の団体や個人と協働しながら多彩な活動を行っている。例えば、2017年から始まった「Reborn-Art Festival」（石巻市街地と牡鹿半島を舞台にしたアート／音楽／食に関する総合芸術祭で、隔年で開催）にも 2.0 のスタッフがさまざまな形で参加している。⁴

2.3 「世界で一番面白い街を作ろう」

2.0 は、震災後にボランティアとして石巻にやってきた人びとと石巻の地元の若者が出会い、これからの石巻を語り合うなかで生まれた団体である。石巻を「新しいまちへとバージョンアップ」という思いが設立時からメンバーの間で共有されていたという。そして、その思いを表しているのが「世界で一番面白い街を作ろう」という言葉である。その言葉と思いについて、つぎのように記されている。⁵

石巻をバージョンアップしたい。／震災の前に戻すのではなく、新しい未来を作りたい。
／被災した店の二階に集まった有志たちの思いから、ISHINOMAKI2.0 は生まれました。
／合言葉は、「世界で一番面白い街を作ろう」。

街を開き、世界中からアイデアや才能や知恵や経験を集め、人と人をつなげ、巻き込み、未来を作る。／古いしがらみは断ち切り、世代や立場を超えて、誰もが主役の未来を作る。
プロジェクトや場所やメディアを融合させて、楽しく、遊ぶように未来を作る。

³ 筆者によるインタビュー（2015年2月16日）。

⁴ 各種プロジェクトについては、2.0 の WEB サイトを参照。

<https://ishinomaki2.com/projects.html>、閲覧日：2022年11月29日。

⁵ 2.0 の WEB サイトより参照（<https://ishinomaki2.com/>、最終閲覧日：2022年11月29日）。図1のTシャツは販売されてもいるし、IRORI 石巻の壁にも掲げられている。

石垣尚志

元の状況に復旧するのではなく、もともとあった地域の課題の解決を含めて、地域内外の資源や人、アイデアをつなぎ合わせて、新しい石巻をつくる。「新しい石巻＝世界で一番面白い街」をめざして、上記のようなさまざまな活動が行われてきた。そして、そのなかに映画上映会も含まれている。

2.0の映画上映会には、石巻の夏祭り（「川開き祭り」）の時期に行う野外上映会と定期的な上映会がある。次の章では川開き祭りをめぐる取り組み（STAND UP WEEK）と野外上映会の様子を見ていく。



図1 「世界で一番面白い街を作ろう」がプリントされたTシャツ

出典：<https://ishinomaki2.com/products.html>（最終閲覧日：2022年11月29日）

3. 石巻 STAND UP WEEK と野外上映会

3.1 STAND UP WEEK：街の祭りを再生する

石巻市には1916年から続く夏祭り「川開き祭り」がある。手漕ぎ船の競漕、灯籠流し、パレード、花火大会、七夕飾りなどが旧北上川と市中心部で行われ、石巻の街をあげて楽しめる祭りである（例年、8月初旬の2日間）⁶。

2011年の夏は規模を縮小して8月1日のみ開催されることとなった。2.0は川開き祭りの1週間前から「STAND UP WEEK（以下、SUW）」と題して、映画の野外上映会、屋外カフェ、地元食材を味わえるバー、参加型のアートイベント、写真展、まちづくりシンポジウムなどの

⁶ 石巻川開き祭りのWEBサイトを参照

（<http://www.ishinomakikawabiraki.jp/index.html>、最終閲覧日：2022年11月30日）。

各種イベントを開催した⁷。それは、石巻の街ににぎわいをつくりだし、震災直後の川開き祭りを盛り上げるためである。2.0 の代表は次のように述べている。

STAND UP WEEK の原点は、通りの信号機がまだ復旧していない震災の年の7月に行った第1回目にあります。石巻地方最大の祭りである川開き祭りまでの一週間を、「まちを知り、まちを楽しみ、まちの未来を語る」まちづくりウィークとして盛り上げようと開催しました。「自粛」という言葉がいろいろなアクションをからめとろうとする空気の中で、被災地の今だからこそやるべきだという「抵抗」、あるいは、被災地に生まれた空間やコミュニケーションを活かしてこそできることがあるという「実験」としての試みでした (ISHINOMAKI2.0 2015)。

SUW は2012年以降も続けられている。開催年によって多少の違いはあるが、1週間～10日くらいの期間で20～30程度のさまざまなイベントが行われている。そのなかには、音楽ライブ、映画の野外上映会、屋外カフェ、復興バー、まちなかピクニック、石巻の子供たちの「はじめてのおつかい」、フットサル大会、石巻工房ワークショップ、ゆかた de 街コン、浴衣パーティー、一箱古本市などの「楽しい」イベントもあれば、まちづくりシンポジウムや街歩きツアーといった「街を考える」イベントもある。まちづくりに関するシンポジウムは、2011年から継続して行われている。

SUW は、そのときだけの一過性の娯楽イベントではないといえる。もちろん、楽しいイベントによって川開き祭りを盛り上げることが目的のひとつではあるが、それとともに、これからの石巻という街を考える場であり、まちづくりの実践の場にもなっているといえる。例えば2014年には「未来作りの見本市」というテーマを掲げて次のようなメッセージが出された。⁸

石巻は、未来の新しい作り方を見つけた。ほかの誰かが決めた手法に頼るのではなく、自分たちで作る。世界中から、クリエイティブなアイデアと知恵を持ち寄って作る。街を外へ開き、人と人をつなぎ、みんなを巻き込んで作る。4年目のSTAND UP WEEK は、それをお見せする見本市。デザイン、IT、音楽、食、アート、伝統、遊び、学びなど、あらゆるジャンルの、あらゆるエネルギーが集結。この夏、石巻がまた一步、世界で一番面白い街に近づく。

2015年には震災によって中断していた「七夕飾り」を復活させた。七夕飾りは竹や和紙でつくったくす玉と吹き流しで、約10メートルの竹竿の先につるされるものである。もともとは商店街の店主たちが競い合うようにつくっていたが、竹かごなどの材料が津波で流出してしま

⁷ 2.0 のWEBサイトを参照 (<http://ishinomaki2.com/standup.html>、最終閲覧日：2022年11月30日)。

⁸ 「STAND UP WEEK 2014」のチラシを参照。

ったこともあり、震災後は中断していた。それを「みんなの七夕」と題して、市民参加型の七夕飾りとして5年ぶりに復活させたのである。七夕飾りづくりワークショップは東京と石巻で行われ、延べ500人以上が参加した。2.0の事務所の隣にあるIRORI石巻（オープンシェオフィス/カフェ）がワークショップの会場となり、川開き祭りが近づくとIRORI石巻のなかはカラフルな七夕飾りでいっぱいになっていた。



図2 2015年の七夕飾り（筆者撮影、2015年7月31日）

川開き祭りの七夕飾りは70年以上の歴史を誇る。カラフルな和紙で作った花かごや吹き流しを竹につるし、その下をみこしや鼓笛隊のパレードが通ってきた。／商店街の店主らが毎年、自主的に製作していたが、震災で多くの店が被災したため設置を見合わせていた。

石巻 2.0 は七夕飾りの復活を通し、市民らにまちへの関心や愛着を呼び起こしたいという。新しい形で七夕飾りを未来へつなぐ試みでもある。(河北新報 2015.6.17)

川開き祭りの当日になると、市中心部の通りに七夕飾りをつるした 24 本の竹が設置された⁹。商店街の店主は「七夕飾りのない祭りは寂しかった。商店主だけでは再開できず、ありがたい。若者たちに伝統を引き継げたらいい」と語る(河北新報 2015.8.1)。七夕飾りワークショップは翌年以降も続けられ、市民がつくった色とりどりの七夕飾りが川開き祭りの風景となっている。2.0 という新しい集まりが、地域の人たちとつながり、地域の伝統文化を新しい形で再生させているといえるだろう。

3.2 STAND UP WEEK : 街の祭りを再生する

3.2.1 ビルの壁に映す

「今だからこそ楽しいこと」のため、SUW ではさまざまな企画が行われている。そのなかで 2011 年の第 1 回から続くもののひとつに映画の野外上映会がある。筆者のインタビューに対して 2.0 の代表は「被災地の状況を使った、未来に向けたポジティブな手作りのお祭りというのが STAND UP WEEK です。そのメイン・コンテンツのひとつが野外上映会です」と語る。

(2011 年) 当時、いろんな困難な状況や事情があったんですけど。そのなかでも被災地を重く覆っていた空気で、いわゆる「自粛」とか「不謹慎」という言葉がありました。それはむしろ地元の被災した人たちではなくて、被災していない人たちや地域から出されていたような気がします。もちろん、ご家族を亡くした方々は不謹慎なんて言っている場合ではなくて、本当に打ちひしがれていました。そうではなくて、そういう人たちの気持ちを勝手に慮って、勝手に配慮して、外から、外部から「余計なことはやるな」という声がありました。それは私たちにしては、とても嫌なものでした。本当の復興のためには、ちゃんと元気になれること、子供たちが楽しめること、前向きな企画やコンテンツが必要だろうと考えたんです。映画は、みんなが共感できる、みんなでひとつのものを観て盛り上げられるコンテンツなので、早い段階から(映画上映は)アイデアとしてあがっていました。

(カッコ内は筆者が加筆)¹⁰

みんなが楽しめて元気になれるもの、前向きになれるものとして映画の上映会が企画された。それが「野外」上映会になったのは、多くの観客を収容できるホールが震災のために使えなくなったからであり、そして震災によって大きな空間ができたからでもある。野外上映会で映画

⁹ 歩道には七夕飾りをつるす竹を設置するための溝(竹を差し込む穴)が掘ってある。七夕飾りのときに使用するだけなので、普段は鉄製の蓋でふさいであり、そこに穴があることは分からない。準備のために蓋を開けると海水が溜まっていたという。それは、津波の海水だった。

¹⁰ 筆者によるインタビュー(2015年2月16日)。

が映されたのは「スクリーン」ではなくビルの壁面だった。津波でできた空き地にイスとベンチを並べ、日没後に、隣のビルの壁面に映画を投影したのである。野外上映会は映画という「楽しさ」、みんなで映画を見るという「楽しさ」を提供するとともに、震災がつくりだした被害（空き地）を創造的な空間へと転換しようとする試みでもあるといえるだろう。



図3 2013年7月26日の野外上映会（出典：ISHINOMAKI2.0）

2011年の第1回SUWでは7月23日から8月1日の10日間で、『ウォレスとグルミット』、『ALWAYS 三丁目の夕日』、『トイ・ストーリー3』、『ハリー・ポッターと賢者の石』、『ドラえもん 新・のび太と鉄人兵団』、『バック・トゥ・ザ・フューチャー』など17作品を上映した。会場には野外カフェもあり、家族連れやさまざまな年齢の人たちが一緒に楽しめる体験が提供された。

2012年には3日間にわたって開催された。ビルの壁に投影する野外上映では、ドラえもんの映画作品に加えて『チャップリンの冒険』（1917年製作）と『キートンの探偵学入門』（1924年製作）というサイレント映画が活弁とギターとフルートによる生伴奏の音楽付きで上映された。また、復興商店街では「映画と絵本の会」と題して、岡本忠成監督のアニメーション映画（「花ともぐら」「日本むかしばなし さるかに」「おこんじょうるり」）の上映と原作となった絵本とショートショート（星新一「花とひみつ」）の読み聞かせが行われた。

上野（1983）は、子供の頃（1950年代）の映画館体験を次のように述べている。それは野外での映画上映会である。

わたしが初めてそれと意識して出掛けていった映画館は、狛江第一小学校、すなわち、通い慣れた小学校の校庭であった。（略）この映画館に行くようになったのは、2年生より上に

なってからのこと、つまりは昭和 23 年よりもあとの話である。(略) 家から学校まで子どもの足で 30 分近くもあったろうか、いつまでも明るさの残る夏の空がそれでも次第に暗さを増していくなかを歩いていくと、それはもういつもの学校への慣れた道筋ではなく、何やらあやしげな活気に満ちた通りになっていた。同じ方向に歩いていく人は、大人でさえも、これから映画に行くからあんなに急ぎ足になっているのだ、と思ったりした。映画はすでに、遊び友だち数人と連れだって歩いてゆくその道で始まっていたのだ。(上野、1983、p.10) 必ずしも学校の庭に限ったことではないが、神社であるとか、公園であるとか、村の公民館の空地だとかに、即席の、一夜限りの映画館が開かれるというのは、戦後の一時期にあっては、わたしの住んでいた村だけではなく、全国どこでも見られた現象であろう。(略) いったいどれほどの人が、この一夜限りの、野外の映画館に足を運んだのであろうか。わたしもまた、そのなかの一人であった。と同時に、それこそがわたしの最初の映画館だったのだ。(同上 p.12)

野外上映会ではさまざまな年齢層の観客がいたし、祖父母と孫で観にきた人たちもいたという。高齢の人にとっては懐かしい体験であり、子供(孫)たちにとっては初めての新しい体験であっただろう。¹¹

3.2.2 市民が撮った“あの頃の石巻”

2013 年からは NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台の協力を受けて「市民が撮った 8 ミリフィルム：昭和の石巻」という映像上映も行っている。上映するのは、市民が撮影した昭和の時代の石巻、震災前の“あの頃の石巻”が記録されている映像である。

川開き祭りのため市中心部の通りは歩行者天国になる。7 月 31 日の日没後、その通り沿いにあるビルの壁面に市民が撮影した「昭和の石巻」の映像が投影される。多くの人が足を止め、道路の縁石に座ったり、一緒にいる人と話をしたりして映像を見上げていたという。七夕飾りが復活した 2015 年には、昭和の頃の川開き祭りや七夕飾りの映像が上映された。2.0 のスタッフは「やっぱり昔の写真とか映像というのは盛り上がりますね。涙を流す方もいますし。自然と知らない人同士で会話ががあったり、『あそこは、ああだったね』とか会話が始まったりしますね」と、そのときの様子を語ってくれた。筆者が 2015 年の川開き祭りに訪れたときも、多くの人が足を止め、映像を見上げて会話をしている様子が見られた。昔の川開き祭りの映像を見ながら「このときお母さんは小学生で祭りに来てたよ」という親子の会話も聞こえてきた。

2018 年からはメインストリート沿いにある旧観慶丸商店を会場としている。1930 年に建てられた石巻初の百貨店で、2015 年に石巻市有形文化財に指定された。2017 年より文化発信施設として再開館し、2018 年から 2.0 が市指定管理者となっている。¹²

¹¹ 2011 年と 2012 年の野外上映会の情報は、2.0 へのインタビュー調査(2015 年 2 月)とその時に得られた当時のチラシやポスターなどの資料にもとづいている。

¹² 旧観慶丸商店 WEB サイト (<https://kankeimaru.jp/>、最終閲覧日：2022 年 11 月 30 日)。



図4 「昭和の石巻2」（2014年7月31日）のチラシ

2018年の「昭和の石巻」では、映像と写真で川開き祭を追体験することをコンセプトとして、3つのスクリーンで映像を流したり、写真と地図を使ってかつての街並みを再現するワークショップを行ったりして、多くの人が訪れた。その場にいた人たちは、旧観慶丸商店という昭和の記憶と記録を残す建物の中で、かつての石巻を体験・再体験することができただろう。

3.2.3 新しい夏の風物詩：街の人が期待する夏の野外上映

2016年は旧北上川の中州（中瀬地区）で行われ、小さな子供がいる家族を中心に600名を超える観客が集まった。中瀬地区には、津波の被害を受けながらも2012年11月に再開館した「石ノ森萬画館」がある。漫画家・石ノ森章太郎の記念館であり、石巻の文化的なシンボルのひとつだといわれている。

中瀬地区にはもうひとつ文化的なシンボルがあった。それは、約160年の歴史を持つ映画館「岡田劇場」である。造船業が盛んだったころに芝居小屋として建てられ、1949年から映画館

として運営されていたが、津波ですべて流出してしまった¹³。2016年の野外上映会は、岡田劇場という街の映画館があった場所で、津波によってつくりだされた空間で行われたのである。

仮設スクリーンは、地元の工務店の協力を得て、2.0のスタッフとボランティアが“手作り”で設営した。単管で足場と枠組みのようなものを作り、そこにスクリーンとなる白いボードを設置した。会場では地元の飲食店が、パンやピザ、焼きそばなどを販売した。地元のパン屋がこの日のために作った特製パンは上映が始まる前に完売した。



図5 2016年野外上映会の様子①（筆者撮影、2016年7月16日）

野外上映は前日から会場設営を行う。もちろん、協力してもらう地元の事業者とはそれ以前から何度も打ち合わせや調整を行う必要がある。さらに、当日の天候が大きな心配事である。雨が降れば、小学校の体育館に移動して設営を行い、観客を誘導しなければならない。それでも続けられているのは、地域の人びとや事業者とともに作り上げているからであり、そして何よりも石巻の人たちに期待されているからである。実際に野外上映会に数百人の観客が集まることに加えて、夏が近づくと「今年は何日にやるの」や「毎年、子供が楽しみにしている」と声をかけられることがあるという。また、野外上映会で初めて大きなスクリーンで映画を観たという子供もいる。子供を楽しませる、そして街を楽しくするという思いを表すものとして、2016年の野外上映のチラシやポスターには「大人は子どもをわくわくさせなくちゃ」という言葉が使われた。

¹³ 有限会社オカダプランニング「岡田劇場の歴史」（<http://www.okada-p.com/history.php>、最終閲覧日：2022年11月30日）。

野外上映は日没後に始まる。映画がスクリーンに投影されると子供たちから歓声が上がり、映画主題歌が流れると一緒に歌いだす子供たちがいる。石巻の人びと、とくに子供たちや子供連れの家族にとって、夏の野外上映は楽しみなイベントになっている。石巻の夏の風物詩になったといえるだろう。

次に、2012年から始められた定期的な映画上映会の取り組みを取り上げる。



図6 2016年野外上映会の様子②（筆者撮影、2016年7月16日）

4. 映画上映会「ISHINOMAKI 金曜映画館」

4.1 街なかで映画を観る

1958年、人口が約23万人の石巻地域（現在の石巻市、東松島市、女川町）には19の映画館があった。全国的に映画館観客数が減少し始めた1960年代になると石巻市内の映画館は5館になった。1970年代には、このうち2館が閉館したが、2000年にテアトル東宝が閉館するまで約12万人の人口に対して3館の映画館があった¹⁴。震災前には岡田劇場と日活パールの2館となっていたが、街なかの映画館で映画を観ることは石巻の歴史と人びとの日常のなかに根づいていたといえるだろう。

2.0は、一般社団法人コミュニティシネマセンターと「シネマエール東北」プロジェクトの協力を得て、2012年12月より市内の多目的ホール（みやぎ生協文化会館「アイトピアホール」）

¹⁴ 『石巻学』Vol.2、2016年、pp.34-42。

と IRORI 石巻を主な会場として、定期的な上映会を始めた¹⁵。上映会には「ISHINOMAKI 金曜映画館」（以下、金曜映画館）という名称がつけられた。そこには、かつては当たり前だった「街なかの映画館で映画を観る」という文化的活動を復活させる、街なかで日常的に映画を観ることができる場をつくるという目的がこめられている。

2012年12月8日～9日の2日間にわたって「ISHINOMAKI 金曜映画館 開館フェスティバル」と題した第1回目の上映会がアイトピアホールで行われた。昭和30～50年代の石巻の様子を記録した映像と3本の映画の上映に加えて、郷土料理「おくずかけ」の提供、音楽ライブ、子供向けワークショップ（ポケモンのキャラクターが描かれたエコバックを作る「ポケモンワークショップ」）が行われた¹⁶。

アイトピアホールが建てられた場所には、かつて「東北館」という映画館があった。東北館は1914年に開業して、1958年から松竹映画の専門館として多くの観客を集めたが、1970年3月に閉館した。閉館時の支配人のひ孫が2014年から2.0のスタッフ（金曜映画館の支配人）となった。

私は映画やるときはいつも東北館の法被を着ているんです。それを見て懐かしいって思う人もいるみたいで、よく声をかけられます。80代のおばあちゃんは、「戦争中、母親に連れられて東北館で映画を観たのよ、楽しかったわ」とか声をかけてくれました。映画を通して、世代を超えてつながっているんだなと感じます。（『石巻学』2号、p.73）

SUW の野外上映会と同じように、金曜映画館も映画によって街に楽しさをつくりだすことを目的とした。そのため第1回目の上映会から、郷土料理やワークショップなど、映画上映だけではなく楽しみ、「映画プラスアルファ」を提供しようとしていた。

2013年には5回の上映会が行われたが、さまざまな「プラスアルファ」の工夫が考えられている。アメリカの現代アートのコレクター夫妻に関するドキュメンタリー映画『ハープ&ドロシー：アートの森の小さな巨人』では、上映後に現代アートに関するトークイベントを行った。江戸時代の漂流した船乗りたちの物語である『おろしや国酔夢譚』の上映では、江戸時代の石巻の漂流船「若宮丸」（石巻を出帆した若宮丸が漂流をして、その乗組員たちが結果として日本人として初めて世界一周をした）についての講演と映画についてのトークイベントを行った。

¹⁵ 「シネマエール東北：東北に映画を届けよう！プロジェクト」（以下、シネマエール東北）は、一般社団法人コミュニティシネマセンターが中心となったプロジェクトである。芸術文化振興基金等からの支援、映画会社・映画配給会社から無償で映画の提供を受け、東日本大震災の被災地（岩手県、宮城県、福島県）での映画上映会開催および上映会活動への支援などを行った。シネマエール東北の活動は2011年6月から2018年3月まで行われた。シネマエール東北のWEBサイト「7年間の記録」を参照。<http://cinema-yell-tohoku.com/>、最終閲覧日：2022年11月30日。

¹⁶ ポケモンの被災地支援活動「POKÉMON with YOU」は、東日本大震災の被災地でポケモン映画の上映とワークショップを2011年から継続して行っている。詳しくは、WEBサイトを参照（<https://www.pokemon.co.jp/withU/>、最終閲覧日：2022年11月30日）。

ゴールデンウィークには「いしのまきっず映画館」と題して、小学生が段ボールで映画館をつくるワークショップを開催した。子供たちが大人の協力を得ながら、単管で枠を組んで、そこに段ボールを重ねるようなやり方で「映画館」をつくった。とはいえ、段ボールでは映画を観ることができるほどの十分な暗さがなく、映像がぼんやりと映るくらいでストーリーを楽しむことはできなかった。映画としては失敗だったが、しかし子供たちはぼんやりとでも映し出される映像に盛り上がり、そこで影絵をつくって遊びだしたり、「自分たちで映画館をつくる」ことを面白がっていたという。¹⁷

4.2 再会の場になる

工夫をこらした上映会を行っていたが、入場者数は20～30名程度であり、金曜映画館の存在が知られていない状況が続いていた。その状況が変わったのが2013年12月の『ミッドナイト・イン・パリ』上映会のときで、入場者数は約90名になった。地道に続けてきた宣伝活動の効果もあったと思われるが、地元日刊紙『石巻かほく』が上映会の情報を掲載したことが大きな要因だったという。

『ミッドナイト・イン・パリ』はミニシアター系で、ウッディ・アレンなので見やすいとは思いますが、人は集まるかなと思っていたら、このとき初めて90人くらい来たんす。いろんな人が来てくれて、若い人も、おじいちゃんもおばあちゃんも観に来てくれて。一番大きかったのは『石巻かほく』に載ったことです。¹⁸

地元紙に載ることで、さまざまな年齢層の人に情報が届けられた。また、地元のメディアが扱うことで、金曜映画館というイベントに親近感を持ってもらうことができたのかもしれない。

そして、多くの人が訪れることで上映会が「再会の場」になった。当時の金曜映画館スタッフがそのときの様子をつぎのように述べている。

いろんな人が会場に集まってきてくれて。「久しぶり～」とか「元気だった？」とか「震災以来だっちゃ」とか聞こえてくるんですよ。観終わった人たちには「面白かったですか」とか「映画どうでしたか」と聞くようにしているんですけど、「映画よりもすごい久しぶりに会えた人がいて」というお話を聞くことが多くて。¹⁹

来場者から「上映会に来て、震災から会えていなかった人に再会できた」という声が寄せられたこともある。震災後、無事かどうか分からない状況だったという。「無事なのか」や「元気に暮らしているのか」という連絡ができなかった。なぜなら、自分自身も大きな被害を受け、日

¹⁷ 筆者によるインタビュー（2015年2月16日）。

¹⁸ 筆者によるインタビュー（2015年2月25日）。

¹⁹ 筆者によるインタビュー（2015年2月25日）。

常を取り戻すのに時間がかかり、友人や知人への連絡が後回しになってしまったということもある。さらに、相手が大きな被害を受けているかもしれないと想像すると、無事を確かめる連絡がはばかられてしまったからだという。そのような人たちにとって、金曜映画館が「再会の場」になった。

4.3 地域と関わって「集まる場」をつくる

金曜映画館の認知度が少しずつ上がり、石巻の街の人たちが徐々に上映会に訪れるようになり、リピーターも増え始めた。上映会をするたびに「再会」を喜ぶ声が聞こえるようになり、映画が始まることも気にしないような様子でおしゃべりに夢中になる人たち、映画が終わっても会場に残って友人と会話を楽しむも人たちが見られるようになった。

やっぱり何よりも、本当に毎回「久しぶり〜」という声が聞こえるんです。そして毎回それなりに新しい人、新しいお客さんが来ている。さらにそこで新たに知り合って。映画が好きだから。だから、映画が終わっても会場でお話をしてたりとか、そういう風景があるんです。²⁰

石巻の映画館の歴史を特集した『石巻学』(Vol.2)には83歳の女性へのインタビューを紹介する記事があり、「アイトピアホールの上映会を楽しみにしているんですよ。毎回いらっしやる方もたくさんいて、いろいろと話ができるのがいいですね」と語っている²¹。金曜映画館が単に映画を観るだけの場ではなく、街の人たちの「集まる(つながる)場」になってきた。あるいは、金曜映画館が「集まる場」という役割を担うようになってきたといえる。

当初は、映画を観る「楽しさ」、そして「映画プラスアルファ」を提供することを目的としていた。それに加えて、上映会を継続していくなかで、「街の映画館」として「集まる場」や「つながる場」という役割を担っていくことも重要な目的のひとつだと考えられるようになった。第1回の上映会からも地域の参加はあったが、回を重ねるなかで、「地域をまきこむ」、「街の映画館になる」、「集まる場としての映画館をつくる」という目的が明確になってきた。

金曜映画館は街中の映画館として、街の人たちが街に来たり街を歩いたりするきっかけになればと考えてきました。だから、地元で頑張っているお店とか、地元の人たちととにかく関わって、その人たちと一緒にやっついこうという考えになっていったんです。²²

そして、映画を上映するだけでなく、地域の人たちを巻き込んで、地域の人たちが集まり、つながる場をつくるという取り組みが行われるようになる。上映会の企画・運営において、地

²⁰ 筆者によるインタビュー (2015年2月25日)。

²¹ 『石巻学』Vol.2、2016年、p.60。

²² 筆者によるインタビュー (2015年2月25日)。

域と関わり、地域と協働的な関係を形成することが重視されるようになったのである。

「地域をまきこむ」上映会の内容について次節で見えていく。その前にひとつの例を取り上げたい。上映会の企画が決まると、地元のお店に頼んでチラシを置かせてもらったり、店頭にはポスターを貼ってもらったりする。最初の頃は受け入れてもらえないことも多かったが、何度も足を運ぶことで協力を得られるようになった。石巻の街を歩いていると、多くのお店の店頭にはポスターが貼られていたりチラシが置かれていたりして、上映会の情報が目に入ってくる。石巻の街なかには常設映画館という建物はないが、街中に映画上映の情報がある。街を訪れた人は「この街のどこかに映画館があるのだろうか」あるいは「この街のどこかで映画をやっているんだな」という印象を持つだろう。「街の中に映画がある」という風景が作り出されているのは、金曜映画館が地域をまきこみ、地元の人たちとつながり、地域と協働的な関係を築いているからだと考える。

4.4 地域をまきこむ上映会

地域をまきこんで地域ぐるみの上映会をつくるための工夫のひとつとして来場者へのプレゼントがある。

2014年1月に正月映画として上映した『謝罪の王様』では、市内の老舗菓子店「萬楽堂」の紅白餅を来場者にプレゼントした。そのことについて当時の金曜映画館スタッフは「萬楽堂さんは昔からあるお店です。街の人たちをまきこむという意味でも、ここで紅白餅を提供してほしいとお願いした」と述べている。

その後、『ひまわり』上映会では「ひまわりの種」（市内の種苗店の提供）、『冒険者たち』上映会では「削りたて鰹節」（市内の老舗鰹節店の提供）が地元事業者から来場者プレゼントとして提供された。『ひまわり』（1970年公開）と『冒険者たち』（1967年公開）は、来場者のリクエストに応じて「石巻名画座」として上映された作品である。²³

SUWの野外上映会と同じように、金曜映画館でも地元の飲食店が食べ物や飲み物を会場で販売することがある。そのさい、映画にちなんだ飲食物（映画に出てくる飲み物、映画のキャラクターの形をしたクッキーなど）を用意することもあった。たとえば、2014年12月にインド映画の『マダム・イン・ニューヨーク』を上映したときには、インドにちなんでカレーパン（地元の牡鹿半島の鹿肉を使用）やタンドリーチキンパン、そしてクリスマスのお菓子（シュトーレン）などを販売した。

2015年12月には原作者トーベ・ヤンソン生誕100年（2014年）、原作シリーズ出版70周年（2015年）となるムーミンの劇場版作品『ムーミン 南の海で楽しいバカンス』を上映した。会場では北欧のお菓子や映画キャラクターの形をしたクッキーを販売した。

また、上映会をはさんだ約2週間で、地元の団体や事業者と連携して「冬のISHINOMAKI

²³ 地域をまきこんだものではないが、『レ・ミゼラブル』を上映したときには、金曜映画館の来場者ために届けられた主演のヒュー・ジャックマンのメッセージが紹介された。これも「映画プラスアルファ」のプレゼントであるといえる。

で楽しむ北欧ウィーク」というイベントを行った。図書館とカフェがある「川の上・百俵館」では朗読劇「ムーミン谷の冬」を開催し、カフェでは北欧やムーミンをイメージした飲食物を期間限定メニューで販売した²⁴。石巻市子どもセンター「らいつ」では親子連れを対象にした「北欧のブックトーク」、アイトピア通りにある老舗陶器店「観慶丸本店」では「北欧ヴィンテージ食器展」が開催された²⁵。

「北欧ウィーク」の取り組みでは、金曜映画館と地域の団体や事業者とのあいだにネットワークが作りだされ、映画を上映する会場のなかだけではなく、石巻の街なかに楽しきやにぎわいが作りだされていたといえる。

4.5 「映画プラスアルファ」を届ける

「集まる場」をつくるため、そして「映画プラスアルファ」の楽しさを提供するために、地域の人たち、地元のお店や団体をまきこんでさまざまな取り組みが行われてきた。そのことによって、単に映画を上映するイベントではなく、地域をまきこんだ、地域ぐるみの上映会になっていたといえる。以下では、地域ぐるみの上映会の様子をさらに見ていこう。

東京オリンピック（1964年開催）のドキュメンタリー映画『東京オリンピック』（1965年）を上映したときには、市民から公開時の映画ポスターを借りて、上映会場に飾った。上映後にそのポスターを眺めていた来場者から「中学生のときに映画館でこの映画を観たんだ」という感想が寄せられた²⁶。

スタジオジブリのアニメーション映画『耳をすませば』（1995年）のときは、上映前にミニコンサートが行われた。仙台フィルハーモニー管弦楽団のピオラ奏者の演奏に合わせて市内高校の合唱部の生徒たちが映画主題歌「カントリー・ロード」を歌った。

『ニューヨーク 眺めのいい部屋売ります』（2016年公開）はロングセラー小説が原作のアメリカ映画である。日本では2016年に公開されて、全国のミニシアターでヒットした。ニューヨークの街を一望できるアパートに40年間暮らしてきたが、老後の生活を考えてアパートを売りに出すことを決意する。リタイア後の生活を考えるシニア夫婦の物語である。「夫婦＝カ

²⁴ 「川の上・百俵館」は2015年4月に開設された。石巻市小船越にあるカフェを併設した図書館で、ウェブサイトによると「お茶やおしゃべりを楽しめる『にぎやかな図書館』」である。東日本大震災後の防災集団移転で沿岸部から移り住んだ世帯と地域住民の交流の拠点となっている。<http://kawanokami.com/hyappyokan>、最終閲覧日：2022年11月30日。

²⁵ 石巻市子どもセンター「らいつ」は2014年1月に開館した石巻市の児童館。「石巻市子どもまちづくりクラブ」の子供たちが企画・デザインに関わった。子供参加型での運営がなされている。<https://ishinomaki-cc.jp/>、最終閲覧日：2022年11月30日。

「観慶丸本店」は1848年創業の老舗陶器店。陶磁器の販売だけではなく展示会などのイベントが行われ、市外・県外から足を運ぶ人が少なくない。旧店舗の観慶丸商店は歴史的建築物として市から有形文化財に指定され、STAND UP WEEKでは「昭和の石巻」の上映会場となっている。<http://kankeimaru.com/>、最終閲覧日：2022年11月30日。

²⁶ ボランティアスタッフとして受付を担当していた筆者が聞いた感想である。この他には、「競歩の選手がゴールテープをきるシーンが忘れられなくて、それをもう一度見たくて来た」ということや、映画館で観たときは満席だったなど当時の話も伺った。

石垣尚志

「ツプル=二人」の物語であることにちなんで、「ふたりで映画を」割引!と題して、前売りで割引ペアチケットを販売した。そしてペアチケットで来場したふたりの写真を上映会場前で撮影するというイベントを行った。





図9 ペアチケット来場者の撮影イベント（筆者撮影、2016年9月10日）

ニューヨーク 眺めのいい部屋 売ります

人生も、リノベーションしてみませんか？

「アニー・ホール」「恋愛通船」
DIANE KEATON
ダイアン・キートン

「ミリオンダラー・ベイビー」「ショーシャンクの空に」
MORGAN FREEMAN
モーガン・フリーマン

日時
2016年 **9月10日(土)**
1回目 11:00 開映 (開場 10:30)
2回目 14:00 開映 (開場 13:30)
3回目 19:00 開映 (開場 18:30)
上映時間 92分

会場
IRORI 石巻
(石巻市中央 2-10-2 新田屋ビル 1F)

チケット 前売の券！
2人セット割引券 1500円
一般 前売 800円 / 当日 1000円
高校生以下 前売 500円 / 当日 600円
前売券はアイトピアホール、加弁館、ISHINOMAKI2.0 (RORI 石巻)、日和キッチン、かめ七にて販売。

お問い合わせ
ISHINOMAKI 金曜映画館
(ISHINOMAKI2.0 内)
TEL:0225-25-4953
<https://www.facebook.com/kinyouiegakan.ishinomaki>

“ふたりで映画を”割引！
恋人同士でも、ご夫婦でも、友
たち同士でも—ふたりで映画を
みる方へ—とお得な1500円
の2枚セット券を
販売します！
(前売りのみ)

主催：ISHINOMAKI 金曜映画館、一般社団法人コミュニティシネマセンター（シネマエール東北）、ISHINOMAKI2.0
映写：20世紀アーカイブ仙台 協力：石巻シネクラブ 支援：芸術文化復興基金

全曜映画館

図10 「ニューヨーク 眺めのいい部屋売ります」上映会チラシ

フィンランドのヘルシンキを舞台にした『かもめ食堂』（2006年公開）は根強い人気を誇る映画である。金曜映画館の来場者アンケートでも「上映してほしい作品」の項目の中でつねに名前が挙げられており、上映会はほぼ満席となった。映画にちなんだ食べ物として、地元のパン屋が特製シナモンロールを上映会場で販売した。

かもめ食堂

北欧フィンランド、ヘルシンキにある、ほっこりあたたかい「かもめ食堂」の物語。

ハラゴシラエして歩くのだ。

12月18日 2016年 (日) 14:00 開映 (開場 13:30)
上映時間 102分

チケット
2人セット割引券 1500円 (前売のみ)
前売券 800円 当日券 1000円
高校生以下 当日 600円 前売 500円
前売券は、イトピアホール、加賀型、IRORI石巻、日和キッチン、かもめ7良園店、喫茶店むさにて販売。

会場
IRORI 石巻
石巻市中央 2-10-2 新田屋ビル 1F

お問い合わせ
ISHINOMAKI 金曜映画館 (ISHINOMAKI2.0 内)
TEL:0225-25-4953
<https://www.facebook.com/kinyouueigakan.ishinomaki>

「ふたりで映画を」割引！
恋人同士でも、ご夫婦でも、友達同士でも、ふたりで映画を見る方へぐっとお得な1500円の特典セットを準備しています！(前売日のみ)

かもめ食堂と言えばシナモンロール！！
【パン工房 ficelle】の特製シナモンロールを会場で販売します！

主演のあの人がち、美味なサブライズキト？

主催 文化庁、文部科学省、独立行政法人文化庁、独立行政法人映画支援機構、一般社団法人コミュニティ・センター、ISHINOMAKI2.0、ISHINOMAKI 金曜映画館
協力 石巻市、加賀型、東通、東通のつと、大東通場スイスイ、情報おのづら、Cafe natural、Intusury カナイ、パン工房 ficelle
制作 一般社団法人コミュニティ・センター、ISHINOMAKI 金曜映画館 脚本 岡田豊樹

ISHINOMAKI
金曜映画館

図 11 「かもめ食堂」上映会チラシ

この映画の出演者である片桐はいりは、『わたしのマトカ』というエッセイ集を出している。『かもめ食堂』の撮影で滞在したフィンランドでの出来事をつづったものである。

『かもめ食堂』のお客さんのエキストラとしてやってきたスオミ食堂の三人に、わたしは「毎日のお料理すばらしいです」と伝えた。／お料理に負けず、この人たちがまたとびきりすてきな人たちだった。年齢はわたしとそう変わらないと思うが、おじさんお婆さんのカップルと、そしてもうひとりお婆さんという仲良しトリオだ。この人たちの笑顔はいつもほんとうにすばしかった。カウリスマキ映画とおなじくらいひどい目にあっているはずなのに、彼らの顔には映画に出てくる人たちみたいな苦しいわは刻まれていなかった。／お料理のお礼を伝えた時の、あの幸せな笑顔は決して忘れない。まるで、炊き上がったばかりのお釜をあけた時みたいに、もわあと幸せな湯気が上がり、あらわれた笑顔は白くつやつやと輝いていた。／炊きたてのごはんみたいな笑顔の人たちが作る料理がまずいはずはない。フィンランドの国旗とおなじく、白と薄い青色の壁の明るいレストランは、最近ではいつも満席だそうだ。(片桐、2010、p.46)

フィンランドの街の様子、そしてフィンランド人の人柄と魅力について書かれている上記の部分を映画上映前に紹介して、さらに、この日の来場者のために届けられた主演・小林聡美の直筆メッセージを代読した。

岩手県のほぼ真ん中にある早池峰山のふもとに「タイムグラ」と呼ばれる小さな開拓集落がある。『タイムグラばあちゃん』(2004年公開)は、そこに暮らす老夫婦の日常生活を15年間にわたって記録したドキュメンタリー映画である。岩手県が舞台であるため、岩手県内で自主上映が行われるときは、つねに多くの観客を集めるという。石巻では初の上映ということもあり、会場は上映会スタッフの待機席や受付の椅子がなくなるほどの満席となった。

上映会場では、石巻の追分温泉で行われている手づくり市(「峠の市」)の出張開催があり、野菜や岩手県・宮城県の郷土料理——味噌仕立ての「ひつつみ汁」(すいとん汁)、「がんづき」(クルミや味噌を入れた蒸し菓子)——を販売した²⁷。『タイムグラばあちゃん』では、“ばあちゃん”が味噌をつくる様子が詳しく丁寧に撮影されている。それは映画のなかでもっとも印象的なシーンのひとつであり、物語の中心的部分でもある。このような映画の内容にちなんで、味噌を使った郷土料理が販売された。

上映後には監督トークがあり、15年間におよんだ撮影のこと、タイムグラの自然や暮らしのこと、そして映画には収録されなかった“じいちゃん”と“ばあちゃん”のエピソードが話された。監督トークによって、観客は、いま見たばかりの映画を体験することができ、さらにより深く具体的に映画を楽しむことができたといえる。

以上、2.0の野外上映会と定期的な上映会(金曜映画館)の内容を見てきた。それらが、被災

²⁷ 「峠の市」は石巻市の追分温泉で2015年～2017年の4月～9月の第三日曜日に開催していた手づくり市である。2018年からは、年に一度くらいのペースで開催している。

石垣尚志

地の地域コミュニティでどのような役割を担ってきたと考えることができるだろうか。次章で検討していきたい。



全編映画館

タイマグラ ばあちゃん

早池峰の山のおもとに抱かれました
ばあちゃんといいちちゃんの日々
15年間のいのちの記録

2017年
2月26日(日)
開映 13:30 開場 13:00 上映時間 110分 会場 IRORI 石巻

浪川嘉彦監督
トーク付き!

チケット
ペアチケット▶1500円
一般▶800円
高校生以下▶500円

当日券
一般▶1000円
高校生以下▶600円

“ふたりで映画を”割引!
恋人同士でも、ご夫婦でも、
友達同士でも...ふたりで映画を
みる方へくっとお得な1500円の
2枚セット券を販売します!
(前売りのみ)

出張! 峠の市も開催!
4~9月の第3日曜日に追分温泉
で開催されている峠の市。山を下り
今回はIRORIにブチ出張! 飲食や
雑貨販売致します。

お問い合わせ
ISHINOMAKI 全編映画館 (ISHINOMAKI2.0 内)
TEL 0225-25-4953
<http://www.facebook.com/kinyoueigakan.ishinomaki>

主催:文化庁平成25年度次世代の文化を創造する新進芸術家育成事業
一般社団法人コミュニティシネマセンター / ISHINOMAKI 全編映画館 / ISHINOMAKI2.0
制作:一般社団法人コミュニティシネマセンター / ISHINOMAKI 全編映画館
録音:峠の市 協力:みやこ映画生協

図 12 「タイマグラばあちゃん」上映会チラシ

5. 考察

以上で見てきたように、2.0の映画上映会は、映画を見る「楽しさ」と「集まる場所」をもたらしてきたといえる。そのために、「映画プラスアルファ」を考えたり、さまざまなやり方で地域の人々を上映会に巻き込もうとしたりしていた。この章では、「楽しさ」と「集まる場所」に加えてどのような役割を担ってきたのか、2.0の映画上映会が地域コミュニティの中でどのような存在であったのかということを検討する。

5.1 「映画体験」の場所として

社会学者の長谷正人は、土本典昭監督が水俣病問題を題材にして撮ったドキュメンタリー映画『わが街わが青春——石川さゆり水俣熱唱』（1978年）を取り上げて、ドキュメンタリー映画の価値や役割について次のように述べている。『わが街わが青春』は、「一般的で常識的なイメージとしての水俣病を解体し、よりなまなましくこの問題に触れさせるような映画」である。

（略）ここで私たち観客は、まさに名前をもった胎児性患者さんたち一人ひとりが具体的に生きている姿として「水俣病問題」になまなましく出会うことになる（略）。それはたとえば、坂本しのぶさんが雨のなかで通行人にビラまきをしたり、ポスターを貼ったりするときの思いどおりには動いてくれない不器用な身体の動きだったり、うまく使えない言葉を必死に使って舞台上で挨拶する滝下正文君のその独特で奇妙な言葉使いだったりする。それらは、どうやっても一般化できない彼ら「固有」の充実した身振りとして、私たちの感性を揺さぶるだろう。（長谷、2000、p.85）

「よりなまなましく」問題に触れさせるとは、観客に知識を提供するのではなく、「他の何ものとも比較できないような、患者さんたち一人ひとりの『固有』で『単独』の体験の集積として感じ取ることができる」（同上 p.86）ような体験を提供することである。

（略）ドキュメンタリー映画の政治的役割とは、けっしてその映画が主題としている問題を「情報」として効率よく観客に伝達することではなく、その問題の当事者たちでなければけっして感じるこののできない「単独」で「固有」の経験を、そうした「固有性」においてその現場で捉え、それを観客にも経験させることなのである。（同上 p.87）

金曜映画館ではさまざまなドキュメンタリー映画が上映されているが、ここでは『タイムグラバあちゃん』を取り上げたい。『タイムグラバあちゃん』の主題は「問題」ではないが、『わが街わが青春』と同じように、観客が主題になまなましく触れるような体験を提供している。“じいちゃん”と“ばあちゃん”のタイムグラでの生活を、その現場で詳細かつ丁寧に捉えて、ふたりの『単独』で『固有』の経験を観客にも経験させるような映画であるといえる。上映後に記入してもらった来場者アンケートには、次のような感想が述べられている。

- ・岩手生まれの亡くなった母のことが重なってみえました。きびしい自然の中でたくましく強く生きるばあちゃん笑顔が素敵でした。いつも笑顔のばあちゃんが仏壇の前で顔をおおっている姿は切なかったです。
- ・みそづくり、おばあちゃんの想い、「老いる」ことへの寂しさ、一人暮らしのさみしさ、山里くらし。心にしみる映画でした。
- ・よく働き、よく食べ、いっぱい鈴をならし、じいちゃんと話すばあちゃんが格好良く、自分の生活も少し変わるかもしれません。
- ・生きることは日々の営みそのものだという事。50代、60代はこれからというおじいさんの言葉で勇気をもらいました。
- ・金曜映画館さんにはいつも知らない素晴らしい作品を紹介してもらっています。今日の映画も地味だけど、泣いてしまう、素晴らしい映画でした。終わった後の監督の話も素敵で、木のエピソードと味噌作りの話がとてもよかったです。
- ・峠の市と一緒にやっていて、なんか映画と合っていて良かった。
- ・見てよかった。タイマグラ、再訪しようと思う。
- ・映画だけではなく、監督の貴重なお話が聞けてとても嬉しかった。

『タイマグラばあちゃん』という映画の内容だけではなく、金曜映画館という場所が、観客の経験を構成しているのではないだろうか。上述したように、会場では手作り味噌を使った食べ物が用意され、上映後には映画作品に収まりきらなかった“ばあちゃん”のエピソードや、タイマグラの自然の美しさと厳しさについてのエピソード、そして映画の印象的なシーンについての補足的な説明が話されたりした。

金曜映画館の観客は、このような上映会場の状況の中で、“じいちゃん”と“ばあちゃん”の『『単独』で『固有』の経験』を経験したのだ。それは、ただ映画を観るだけでは得られないような経験であるといえるだろう。金曜映画館は、映画を上映するだけではなく、このような「映画体験」の場所を提供していると考えることができる。

5.2 石巻の上映会：その場限りの、いまここの上映会

映画は「技術的複製の芸術作品」だといわれる。人の手による複製とは異なり、技術的な複製は大量に同じものをつくりだすことができる。例としてあげられるのは、写真、レコードやCDであり、そしてかつてはフィルムで、現在ではデジタルデータで複製される映画である。その場所に訪れなければ見ることができない絵画や壁画、その時／その場所でなければ聴くことができないライブの演奏と違って、技術的に複製されたものは、いつでもどこでも同じように鑑賞することができる。どこの映画館で観ても、あるいはオンライン配信ならどの機器で観ても、映画の内容は同じである。

(略) 伝統的な芸術の作品も技術的な複製、すなわち写真やレコードのかたちで鑑賞されるようになっている。レンブラントの肖像画も、ベートーヴェンの交響曲も、作品が唯一

無二のものとして立ち現れていた「今ここ」から切り離されながら複製され、身近な場所で断片的に消費されるようになっていく。ここにはもはや、「本物」の作品がその全体像において、かつ手で触れられないような神々しさをまとう姿を現す余地はない。(柿木、2019、p.151)

複製技術について、ヴァルター・ベンヤミンは次のように述べている。

どんなに完璧な複製においても、欠けているものがひとつある。芸術作品のもつ（いま-ここ）的性質—それが存在する場所に、一回的に在るという性質である。(Benjamin、1935=1995、p.588)

他方で、複製技術は「その場」でなければ鑑賞できない作品から地理的な制限を取り払って、より多くの人が作品を鑑賞できるようにもする。

（技術的複製は）オリジナルの模像を、オリジナルそのものが到達できないような状況のなかへ運んでゆくことができる。とりわけ、技術的複製によってオリジナルは受容者のほうへ歩み寄ることができるようになる—写真というかたちであれ、あるいはレコードというかたちであれ。大聖堂はその場所を離れ、芸術愛好家のアトリエで受容される。ホールあるいは野外で演奏された合唱曲は、部屋のなかで聴かれる。(同上、p.589；括弧内は筆者が加筆)

技術的複製の登場によって、それまでよりも多くの人たちが、「オリジナルが存在している場所」でしか享受できなかった芸術を楽しむことができるようになる、という。とはいえ、「芸術作品をとりまく状況のこのような変化は、他の点では作品のありように影響を及ぼさないかもしれないが、しかし芸術作品の（いま-ここ）的性質だけは必ず無価値にしてしまう」(同上、p.589)。複製技術は「作品が、いま、ここに在るという価値だけは、低下させてしまう」のである(多木、2000、p.42)。

複製技術が芸術作品の「神々しさ（アウラ）」を衰退させるというベンヤミンの主張はよく知られているが、それに対して、次のような指摘がある。

たしかに、「いま」「ここに」しかないという作品の一回性や、それを取り巻く身体や場所の固有性と、「いつでも」「どこにでも」あるという複製技術があまねく行き渡った世界のなかでの表象世界のありようとは、区別して考える必要があるかもしれない。だが、後者の場合においてもなお、われわれはある種の「いま」「ここに」という感覚の存在を認めることができるのである。(吉見、1994、p.19)

「複製技術があまねく行き渡った世界」であっても、芸術作品を体験するときに「いまここ」

という感覚をもつことがある、芸術作品の「一回的にあるという性質」を体験することができるのではないか、という指摘である。

さらに、映画史研究者であるミリアム・ハンセンは、映画館で映画を観るという体験には、その場限りの「一回的」な性質があると述べている。ハンセンはアレクサンダー・クルーゲの議論を次のように紹介する。

クルーゲは、映画が（芸術作品の）「アウラ」の崩壊を促すというベンヤミンの主張は大げさだと述べる。映画の登場によって古典的なアウラは消滅したが、映画館における観客と映画との関係のなかで、アウラ的な経験の新しい形式が生まれているのだ。(Hansen, 1991, p.13; 括弧内は筆者が加筆)

そして、映画館での体験に「一回性」をもたらすのは、上映の様式（上映のやり方、あり方）であるという。映画が観客に与える影響は、「上映される映画作品によってではなく、上映のやり方や鑑賞の状況に左右されていた」（同上、p.93）。映画上映のための専門の場所（ニッケルオデオン）、つまり映画館が登場した 1907 年から 1910 年代の頃、映画館では映画以外のイベント（非映画的な実践）—レクチャー（トーク、解説）、ダンスショー、ライブ音楽、演劇など—が行われていた。

そのような非映画的な実践によって、映画上映には、一回的でその場限りのパフォーマンスという特徴がもたらされていた。それは、いつでもどこでも同じように映画を上映するだけのイベントとは違っている。（同上、pp.93-94）

映画以外のイベントは全国的に標準化されたものではなく、その映画館の客層に合わせた「ローカル」なものでもあった（同上、p.100）。映画館に映画を観に行く人たちが楽しみにしていたのは、いつでもどこでも観ることができる映画というよりも、むしろそのときその映画館でしかできない体験、「映画作品の体験ではなく劇場体験（a theater experience, not a film experience）」（同上、p.99）であったという²⁸。1920 年代に行われた調査によると、映画館観客のうち「映画作品の鑑賞を目的とする人は少数派（ある調査では 10%）であり、圧倒的な多数派（68%）は“イベント”を目的として来場していた」（同上、p.99）。

映画は「技術的複製の芸術作品」ではあるが、映画を映画館で観ることには「一回性」であり「その場限り」という性質があるとするハンセンの議論に、本稿は同意したい。映画館での映画体験は、その場限りで「いまここ」の体験であると考える。

これまで見てきたように、石巻の野外上映会と金曜映画館では、単なる映画上映ではなく「映画プラスアルファ」の楽しみを提供していた。つまり、いつでもどこでも観ることができる映

²⁸ 「映画作品の体験ではなく劇場体験」という言葉は、ハンセンが作家のリチャード・コスルスキーの言葉を引用したものである。

画のイベントではなく、「その場限り」で「いまここ」でしか体験できない上映会である。上で見た『タイムグラバあちゃん』上映会も、まさに「その場限り」で、石巻でしか体験できないものであるといえるだろう。「非映画的な実践」は地域の人びとを巻き込んで行われており、「ローカル」なものが多い。石巻の「いまここ」の上映会は、その地域に特有の上映会であり、石巻という街の上映会であるといえるだろう。

5.3 街の上映会：愛着のある場

金曜映画館では上映会を重ねるたびにリピーターが増えてきた。来場者アンケートで「金曜映画館に期待すること」の質問に対しては、「継続してほしい」「長く続けてください」「これからも良い映画をたくさん見せてください」「会場の雰囲気がとても良い」「いつも楽しみにしています」「次も楽しみにしています」「またぜひ足を運びたい」といった声が寄せられている。また、満席になった『人生フルーツ』では「今日は大入り満員で良かったですね！」とも（その他の感想を抜粋したものを表1にまとめた）。

観たばかりの映画への感想だけでなく、上映会や金曜映画館という場への感想が多く寄せられている。映画を楽しみにしていることに加えて、金曜映画館という場で、石巻の街の映画館で映画を観ることを楽しみにしていることがわかる。そして、この場がこの街にあり続けることを願う声も多い。映画を観にくる人たちにとって、金曜映画館が愛着を感じる場になっているといえるだろう。

また、昔の映画を観ることで、当時の「映画体験」を思い出している人もいる。テレビで視聴するのではなく、「映画館」（暗い空間、大きなスクリーン、音響設備、そして他の観客の存在）で観ることによって、当時の「映画（館）体験」を想起し、それを再体験していることができる。

『この世界の片隅で』では、当時のことを思い出す人（戦争体験者）もいれば、戦争の焼け野原と被災地を重ね合わせる人もいる。「焼け野原の広島、呉の街と、津波の女川、門脇のまちが重なった」、「復興の旗が描かれていて涙が出ました。たくさんの人に見てもらいたい」と。主人公「すず」の前を向いて生きていく姿を被災後の自分たちに重ねる人もいる。映画は娯楽でありつつ「体験—自らの体験を想起したり、それを再体験したり、または登場人物の考え方・生き方を自分に重ねるような体験—である。繰り返しになるが、金曜映画館は、ただ映画を見せるだけではなく、このような「映画体験」の場を提供しているのだ。

野外上映会は夏の風物詩になり、その場限りの映画体験を提供する金曜映画館は人びとが愛着を感じる場になっている。石巻の上映会は、映画を観る「楽しさ」と「集まる場」を提供することに加えて、その場限りの映画体験を提供するという役割、そして愛着のある場という役割を担っていると考えることができる。

表1 来場者アンケートより抜粋

上映作品	感想
ハーブ&ドロシー	おしゃれな雰囲気良かった。
	とても素敵な心地よい空間。
	今回のような映画やトークイベントを観たいと思います。
	普通の映画館では上映しない素敵な作品が見たい。
どこまでもいこう	街中で観られれば何でも良い。石巻まで来ないような、しかも話題になったもの。
	金曜映画館にしかできないことを希望します。
おろしあ田夢譚	タイトルだけは知っていた映画でしたが、20年も昔の映画とは思えない作品でした。
	久しぶりに内容のある、いい映画を見た充実感。
	どんなジャンルでも、シネコンにかからない良い映画が見たい。
謝罪の王様	気分転換になりました。
	笑いがいっぱい、ストレス解消になった。
	大きい映画館では笑うのも泣くのも声には出さないようにしていますが、今回は大きな声で笑うことができました。他の皆さんもそうしていたから自然とそうなったのだと思います。
	久しぶりに笑えてよかった。
	テレビでは放映されないような、石巻には来ないような映画がみてみたい。
ひまわり	昔、テアトル東宝で鑑賞しました。思い出しました。
	昔、主人と見たときのことを思い出しました。
	昔、見ました。なんとも言えなく、とても良かった。
	また見に来たいと思います。
	音楽も素敵で心に残りました。大画面で見るとちがいますね。
	「ひまわりの種」プレゼント、嬉しい!
かくや姫の物語	久しぶりの映画で夢をもらった気がします。
	感動しました。涙涙でした。映画館での上映を見逃してしまっていたので、今日見れて良かったです。ありがとうございました。
冒険者たち	何年も何年も前に見て、若い頃の自分が思い出されました。
	なつかしい。35ミリフィルムのカラカラいう音が素敵でした。
	昔から好きだった作品。手作りのこうした会場で鑑賞できて一層いい感じでした。
タイムグラバあちゃん	とても良い雰囲気でした。ゆっくり見ることができました。
	コーヒーの香りがして雰囲気がよかったです。
	街中で、年配の人達も多く良い雰囲気、このまま続けてほしい。
	昨年、現地に行ってきたので、一度見てみたくて来ました。
	今後ずっと続けていただきたいです（都合のよい日はぜひみたいです）。速くに行けないので。
この世界の片隅に	焼け野原の広島、呉の街と、津波の女川、門脇の街が重なった。良いものを石巻にもってきていただきありがとうございました。
	復興の旗が描かれていて涙が出ました。たくさんの人に見てもらいたい。
	震災後としても、とても意味のある作品だと感じました。
	強く生きるとはどういう事か、考えさせられました。
	私は12才で終戦をむかえましたので、あらためて現実に戻された気分で感無量です。
	母が話していた戦争中の話がだぶってみえました。
皆で共感できる感覚を楽しめました。	
シング・ストリート	金曜映画館サイコーです。リピート決定です。自分では選ばないようなジャンルの映画に出会えて良かったです。
	初めて観に来ましたが良かったです。また観に来たいです。
	広報を強化して、もっとたくさんの人に認知され、1回の上映会が毎回、お祭りのようになってほしい。
	2回目の訪問でした。大満足です。ありがとうございました。
人生フルーツ	石巻でこの映画をみる事ができて、とてもラッキーだと思います。
	いろんなところで上映されているので石巻でかかって嬉しい。すてきなご夫婦の話ですばらしかった。
	見るのがもったいなくて、あえて見ずにとっていた映画です。金曜映画館で見られて良かったです。
	毎回は来られませんが、いつもチラシが送られるたび楽しく見えています。是非、続けてください。
	この企画を楽しみにしている人が大勢いることがうれしかった。
	今日は大入り満員で良かったですね!

備考：来場者アンケートより筆者が抜粋して作成した。

5.4 今後の展望

東日本大震災の被災地では、仮設住宅に仮住まいをしていたほとんどの人が復興住宅などへ移り住んでいった。櫻井・伊藤（2013）は、新しいコミュニティを形成するさい、人びとの話し合いやコミュニケーションを促すことが課題であり、そのための支援が必要であると指摘する。そのような支援を受けて新たなコミュニティを形成しているところもあるが、他方で複数の仮設住宅から移住してきた復興住宅でのコミュニケーションの不在（「つながり」の希薄）が問題となっているところもある。

東日本大震災の被災地では、家を失った住民らが仮設住宅から災害公営住宅（復興住宅）などへ引っ越し動きが進んでいる。ただ、復興住宅の入居者は高齢者の割合が高い傾向で、住民の見守りやコミュニティの再生など課題も指摘されている。／宮城県沿岸部の女川町中心部にある鉄筋コンクリート造4階の復興住宅には、約200世帯が暮らしている。ここに一人で暮らす男性（67）は「住まいとしては今が快適。だけど、居心地は前の方が良かった」とこぼす。前とは3年前まで住んでいた近くの仮設住宅だ。／壁が薄く近くの住民の様子もうかがえた仮設住宅だったが、今ではドアを閉めると物音ひとつ聞こえない。毎朝行われているラジオ体操も、参加者の姿はまばらだ。ベランダで参加する人もいるが、終わるとすぐに室内に戻る人が目立つ。（読売新聞、2017年3月5日「復興住宅『つながり』希薄」）

東日本大震災で被災した岩手と宮城両県で、災害公営住宅（復興住宅）での孤独死が仮設住宅と比べて大幅に増えている。2018年は前年の47人から68人となり、仮設住宅での孤独死が最多だった13年（29人）の倍以上に。復興住宅は被災地の住宅政策のゴールとされてきたが、新たな課題に直面している。（朝日新聞、2019年3月11日「復興住宅での孤独死が急増 昨年68人、入居後に孤立か」）

また、2017年に岩手県大槌町の復興住宅で行われた調査では、11%の回答者が「復興住宅への訪問者がいない」と答えている。

復興住宅への過去1か月間の訪問者は、家族・親族（55.5%）、知人・友人（52.7%）の他、心身面の相談員（13.0%）、生活面の相談員（10.3%）などだった。「今の地域で親しい人」は15.1%で、同様の質問を2016年に仮設住宅で行った時の回答（22.0%）を下回った。訪問者ゼロも11%おり、特に男性は17.9%に上った。（読売新聞2017年3月23日）

そして、震災から11年が経つ2022年になっても、人と人のつながりやコミュニティの再建・活性化という「生活の復興」は未だ大きな課題として残されている。

「2つの震災が残す課題 孤独死600人超、つながり構築に壁」／東日本大震災からまもなく11年を迎える被災地で、コミュニティの希薄化が深刻になっている。新型コロナウ

ウイルス禍が人と人のつながりを断ち、地域を支えてきた NPO の活動も行政の支援の打ち切りで縮小を余儀なくされている。震災後の孤独死は 600 人超。阪神大震災から重要性が指摘されてきた住民のつながりの再生は、被災地がなおも抱える重い課題だ。(日本経済新聞 2022 年 3 月 8 日)

このような状況において、「集まる場所」という役割を担う映画上映会は、さらに重要な意味を持つのではないだろうか。そのような場所で、どのような「つながり」が創り出されるのかということについては、今後の研究課題としたい。また、被災地の生活復興に向けたさまざまな取り組みのなかで、映画館・映画上映会にどのような特徴や独自性があるのかということも検討していきたい。

引用文献

Benjamin, Walter. 1935. "Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit." (浅井健二郎編訳・久保哲司訳、1995 年、「複製技術時代における芸術作品 [第二稿]」『ベンヤミン・コレクション I 近代の意味』筑摩書房、pp.583-640)。

Hansen, Miriam. 1991. *Babel and Babylon: Spectatorship in American Silent Film*. Harvard University Press.

長谷正人、2000 年、『映像という神秘と快楽：“世界”と触れ合うためのレッスン』以文社。

石垣尚志、2022 年、「文化政策と映画館：ノルウェーの映画・映画館政策と市営映画館を事例として」『東海大学紀要文化社会学部』7 号、pp.51-70。

一般社団法人 ISHINOMAKI2.0、2015 年、『石巻 STAND UP WEEK 2014 未来作りの見本市 報告書』。

柿木伸之、2019 年、『ヴァルター・ベンヤミン：闇を歩く批評』岩波書店。

片桐はいり、2010 年、『わたしのマトカ』幻冬舎。

櫻井常矢・伊藤亜都子、2013 年、「震災復興をめぐるコミュニティ形成とその課題」『地域政策研究』第 15 巻 3 号、pp.41-65。

多木浩二、2000 年、『ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読』岩波書店。

上野昂志、1983 年、『映画＝反英雄たちの夢』話の特集。

吉見俊哉、1994 年、『メディア時代の文化社会学』新曜社。